

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第十五卷第三号（通巻第一七一号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第171号

7. 2008

目高

品川 鈴子

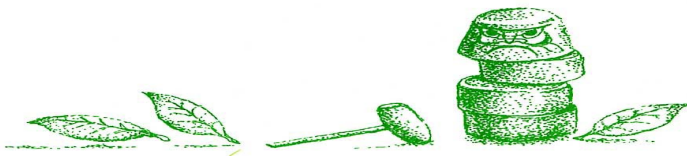
手弁当食ぶ豎穴にハンケチ敷き

神木に宿る風蘭手とどかず

平福

藏座敷川戸を開き蛭待っ

黒豆を擡げる双葉お仕置き場



毛虫這ふ刑場あとの苔地蔵
蛇は首振り水田の方位知る
中学生にどう教へんか花魁草
梨剥けば皮も二人のイニシャルに
鈴庵に目高貰ひて大家族
邸町花ジャスミンの垣曲がり



玉

鈴

吟

兵庫 岡 有志

びかびかのだぶだぶの服入学児
霊園の彼方の海に帆が霞む
「千の風」妻の墓前に花の片
ぼたり落つ椿秘密を守りぬく
復活祭砂中の卵児がさがす

埼玉 岡田 章子

歯を見せて笑ふ阿羅漢花明り
鮮やかに洋名多き春花壇
遠州の庭に寛の春の音
杖たよる花人となり神田川
春疾風道を転がる缶の音

愛媛 岡野 峯代

糸桜見上ぐ反り腰一步二歩
水底に根元ありそう逆さ花
ライト浴び水面は鯉の花衣
花見莫塵児の目隣の賑わいへ
飛花落花「静」の舞か吉野山

大阪 岡本 幸枝

隨身門入れば赤白振れ梅
節樽手時にセクハラ嵯峨狂言
こっぽりで外輪に歩く智恵詣
ロケットの噴射待つごと御松明
またげ石またげ損ねて椿落つ

大阪 奥田 妙子

老いという向い風なり二分の花
過ぎさりし事は云はずに花は二分
城見えて大川沿いは花の風
川沿いの花を見巡る帰国子と
カンデンデン嵯峨狂言の始まれる

東京 片野 光子

遠足の子らと見晴らし台に立つ
袋の絵眺めつつ蒔く花の種
春風に乗せて届ける我が思ひ
呑み込めぬパソコンの技春霞
若者によりかかれて万愚節

兵庫 勝野 薫

淵に鮠土手にムスカリ志染川
城趾のベンチでメール春落葉
太き枝伐られ青葉の博打の木
黄檗なる美濃和紙箋の花便り
一人静棹物あれば自服して

兵庫 金田美恵子

山城を説きし翁の玉の汗
山城の南千畳句碑灼けり
蟬時雨屋敷に防空壕残る
蜘蛛の罅の占む一坪の防空壕
饒舌となりし主や夏座敷

兵庫 唐鎌光太郎

町日永そば屋の水車動かざる
近辺の桜集めし写真帳
塀越しに花散り来たる迷ひ道
密やかな語らひもあり花むしろ
春深し薩摩のジューズ黒酢入り

兵庫 川合まさお

軒先に農薬なしと土筆売る
兄の忌や古巢に戻る初燕
春霞む空へ跳ね橋開きけり
抱かれし花より白き稚睡る
雉子の声栽培記録のペン止める

大阪 河村 泰子

太陽の塔が手招く花の蔭
花見幕トランペットの風孕み
大使らも舞ひつ歌ひつ花の園
桜湯を古唐津に入れもてなせり
花冷に粥透きとほり少女病む

東京 岸 はじめ

花菰の狭庭踏み処のなかりけり
放水に隣家解体羽蟻とぶ
制札や群れて蜜蜂小栖の木
杣道にひととき坐すや花すみれ
雉蓆群れ咲く丘に昼餉かな

東京 北川とも子

桜葉積りたる紅の豊かさ
病室の声の途ぎれて春の昼
ひと日暮れて白木蓮のうすあかり
ふらここを下りて揺らぎの中にをり
浅き夢見し木蓮の咲く朝に

東京 北畠 明子

咲きほこるぎんようあかしあ電車基地
声とどくほどの対岸花の風
春らんまん鳥それぞれに好きな枝
風眩しスプーンに光る砂糖粒
桃一枝スポーツバッグよりのぞく

薬草歳時記

(二七〇) ハッカ(薄荷)

菅原由紀

黒船の噂も知らず薄荷摘み

芥川龍之介

薄荷は草花の時から独特のにおいを放つ。別名メグサ、メハリグサとも言われ、葉っぱで臉の上をなでると目が、スーと気持ちよく感じられる。

漢名の薄荷の音読みからハッカの名がつけられたという。日本では本草和名、和名抄に登場「波加」と記されている。

属名の *Menthe* は古代ラテン名からと言われているが、ギリシャ神話に出てくる *nymph* (自然の中の神話の精霊) の名前の *Menthe* からつけられたとも言っている。

日本各地、東アジアの温帯地方のやや湿った原野に野生する多年草で芳香がある。

地下茎、匍匐茎を出して枝わかれし、地下茎で繁殖する。

花は淡紫色から白色の唇形で小さく群がって咲く。茎は四角茎で直立し20から60cm、葉は対生し狭卵形から長楕円形で長さ2〜5cm、花の時期は8月から10月。葉は6〜8月に採取し、水洗いし陰干しにする。秋に花が終わり、下葉が黄緑色になる頃、全草を刈りとり陰干しにする(薄荷

葉と呼ぶ)。主に漢方処方に配剤される。7月から9月に刈りとり、陰干し、蒸留したものをハッカ取卸油トリハッカという。ハッカ取卸油を強冷してメントールを結晶させたものをハッカ脳、残りの油分を脱脳油。一般的にはこれをハッカ油と呼びメントール30%を含む。

ハッカの仲間にはセイヨウハッカ、オランダハッカ(ミドリハッカ)、ヒメハッカ等。

セイヨウハッカの精油はペパーミント油と呼ばれ、メントール50〜60%を含み、チューインガムやお菓子、洋酒のカクテル等中使用。オランダハッカの精油はスペアミント油と呼ばれる。肉料理のソースやつめもの、菓子、飲料の風味付け、又、ポプリや入浴剤としても利用価値が高い。ハーブティーとしてのミントは気分をスッキリさせ消化促進疲労回復に役立つ。ヒメハッカは種名ヤポニカーと呼ばれるように日本のもの。

薬用には薄荷葉を用い、柴胡清肝湯、清上防風湯、防風通聖散等に消炎、排膿、潰瘍、健胃、驅風等の目的で配剤されている。民間薬としてはガスがたまった時に葉を煎じてのむとよい。虫さされなどにも生薬汁をすりこむ。

ハッカの響とミントの響き。同じものとは思えないにもかかわらずとモダンさを感じる。不思議に思えるが古くは伍人りドロップの中の不透明な白いアメ、昨日食べたケーキの上にも一枚の小さなミントの葉が一枚添えられていた。

参考文献 「牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「薬草手帳田中孝治」平凡社

著者略歴神戸薬科大学卒

ハッカ (メグサ) [ハッカ属] (しそ科)

Mentha arvensis L.
var. *piperascens* Malinv.

(薄荷)

花：8月初旬



薄荷咲きマリア塚への道細し	星涼し白き光の薄荷飴	一葉の薄荷をつみてティータイム	畦に咲き薄荷の花の目立たざる	薄荷咲き癩つよく鳴く山の鳥	薄荷蒸す捨湯貰ひに山の娘等	シェフの手が青きミントの花を摘む	薄荷咲くうすむらさきの風匂ふ	にぎやかに薄荷咲きをり脳死論	肩痛き浴衣の糊や花薄荷
塩出 眞一 (ぐろつけ)	北畠 明子 (ぐろつけ)	片野 光子 (ぐろつけ)	松本 武雄	永作 火童	田島 一信	井越 芳子	今井千鶴子	石 寒太	森 澄雄

鈴の奏

品川鈴子選

花びらは仰ぐうなゐをすべり落つ 兵庫 井上加世子

白髪のメデウサか夜の雪柳
少年の目は花よりも屋台店

遺影持つ伏目も見やる花堤

陣痛の喘ぎ続けり雪積る 大阪 吉田 和子

雪やみて尖り頭の嬰生まる

指長き嬰の手ちからうらけし

靴ひもに落花一片はさみしまま 兵庫 上田 幸夫

墓鳴いて夜遊びせよとそそのかす

大の字で天下取る夢夏座敷

切薔薇のしをれ六十路の恋終はる

諍ひて一日無言夏蜜柑 兵庫 櫻木 道代

朝桜足音つらなる地下出口

鎖とけ犬の遁走春の泥

蜂蜜の結晶に匙花の冷

春の雷葉草風呂の濁りたる

紬ぎ布染めし日もあり花蘇芳 神奈川 八張 さち

小雨降り熱のある目に白木蓮

友も又独りとなりぬ花の宵

花の宵オーボエソロの孫娘

花の雨久に螺子巻くオルゴール 兵庫 大西 和子

花の里維新の志士の潜居跡

谷一つ埋めつくせり山桜

引潮の魚崎運河花海棠

フラフープふるふる花吹雪 東京 木野 裕美

花びらを留めびかぴかランドセル

師の墓所に桜吹雪のほしいまま

花落し尽し老桜安らけし

春霞超音波にて孫に会ふ 兵庫 中井 光子

厨でも指示する夫や春定年

花明りふれあい喫茶談はずむ

花冷えや厚手薄手と日日まよう

故里は母の居るところ水温む 兵庫 有本 勝

浄土寺や三尊のみの春惜しむ

秀

鈴

記

巻頭 三句 品川 鈴子 評

四句／十五句 栗田 武三

*選句は全て 品川鈴子

花びらは仰ぐうなぬをすべり落つ 井上加世子

「うない」とは、平安初期頃からの子供の髪型のこと。うなじで束ねたもの、又はうなじのあたりで切り下げておくもの。散る花を仰ぎ見る幼い児か少女、その無垢な髪へ花弁が降りかかり、さらりと滑り落ちる。美しい絵巻のひとこまを想わせる。

雪やみて尖り頭の嬰生まる

吉田 和子

産みの苦しみを堪えて降りしきる雪も何時しかやむころ、やっと聞いた呱呱の声。自然分娩の痛みを親子で分かちながら、産道を潜った赤子は、柔軟な頭蓋骨が細長くなって尖り頭にみえるが、一時的なことゆえ心配はなく、むしろ自力で世に出た勲章でもあらう。

墓鳴いて夜遊びせよとそそのかす

上田 幸夫

墓蛙は肥大した体に短い四肢、だぶだぶの黒い皮膚には

疣が多く、動作も鈍い。大きな耳腺を持ち、白い有毒粘液を分泌する。夜に這い出して舌で昆虫を捕食する。不気味な声で鳴くのがいかにも夜遊びをせかせて、悪い方へ誘いこむようで、真面目な作者を怖れさせる。

鎖とけ犬の遁走春の泥

櫻木 道代

春の泥は凍解・雪解・春雨などによって時にぬかるみのはげしいこともある。

繋いでいた愛犬の鎖が解けて逃げ出した。びっくりして後を追うが、泥道に阻まれてなかなか追いつけない作者。●遁走が句を楽しくしている。

花の宵オーボエソロの孫娘

八張 さち

オーボエは、高音域の木管楽器でオーケストラでは常席を占める楽器である。

燈火に浮き立つ桜の下に、繊細で甘美な音色が流れてくる。それは、最愛の孫娘さんの独奏である。至福のひとつとき。

花の雨久に螺子巻くオルゴール

大西 和子

オルゴールを手に入れた当初は、何度も螺子を巻いて美しい音色に耳を傾けていたが、いつしか飾り物になってしまった。

花見の約束の今日は、生憎の雨。ふと棚の上のオルゴールが目に残り、久し振りに螺子を巻いて思い出を辿っている作者。

フラフープふるふる花吹雪

木野 裕美

フラフープの流行は、五十年前程前。体を前後左右に振って落ちないように必死で腰を回していた。今また流行の兆しとか。

ふるふるふるが花吹雪と相俟ってリズム感のある句になった。は行の繰返しも句を引き立てている。

厨でも指示する夫や春定年

中井 光子

今年定年を迎えられたご主人。三月までは多くの部下を

指導する立場に居られた。

定年退職されてからは、台所でも何だかんだと指示されている。それを広い心で受け止めている作者。

二月堂晴れてまた降る春の雪

有本 勝

二月堂は奈良東大寺の境内にあり、毎年修二会が行われる。本尊十一面観音に罪障を懺悔する法要である。行事の代表名であるお水取りは、三月十三日午前二時頃。

お水取りも終った温かい日、二月堂辺りを散策していると淡雪が降ってきた。うたかたのようにすぐに消えてしまふ春の雪ならではの風情が漂う句である。

太鼓にも動ぜず寝る児花の午後

伊藤 公女

春の盛り、お子さんを乳母車に乗せている。桜の枝が揺る下で飲み食いしている人達は楽しげである。

賑わっている群衆に突如太鼓が鳴り響いた。大人達は驚いて顔を見合わせているのに乳母車のお子さんは熟睡している。大器に成人されることでしょう。(以下略)